

きずな

いのち。つながるマガジン Vol.4
2013.3



東北、夜明け前

東日本大震災から二年近くが経過した。震災がもたらしたあの悲惨な光景は、遠く離れた地に暮らす私たちの記憶から徐々に薄れつつある。また、被災地の現状を伝える報道は当時に比べて極端に減り、ボランティアや支援物資の提供に関する呼びかけもあまり聞かれなくなった。震災は終わったのか？被災地は復興したのか？

そのような疑問を解決すべく、震災直後から仙台を中心に復興支援を続ける浄土真宗本願寺派長野教区のボランティアに同行し、被災地の「いま」取材してきた。

2012年11月26日

卸町五丁目公園
仮設住宅



目にも鮮やかなお手製のストラップとティッシュカバー

まず向かったのは、仙台市の中心地から四kmほど東、若林区にある卸町五丁目公園仮設住宅。文字どおり公園内に設けられた仮設住宅だ。仮設住宅は公園に建設されるケースが多い。自治体による用地の確保が容易なことが、その最大の理由であるようだ。ここには九五世帯、約一五〇名の被災者が暮らす。長野から持参したそばとリンゴを振る舞い、住民の方々と交流を深めたのちに話を聞いた。

集会所での取材であったため、個々の生活空間の様子は窺い知れないが、「住みやすいとは決して言えない環境」だと住民は口々にもたす。部屋同士を隔てるのは薄い壁一枚。床



に至っては、仮設住宅一棟すべての部屋がひとつの床板でつながっているのだという。隣人の足音さえも聞こえる居室内では、「できるだけ小さな声で話し、テレビのボリュームも極力絞っている」そうだ。

ところが、そのような厳しい住環境の中でも住民は前向きだ。「いつまでもふさぎこんでいても仕方がない」というのが本音のようだが、それにしても集会場は明るい雰囲気だった。趣味の合う仲間を手づくりクラブやカラオケクラブなどを立ち上げ、住民相互のコミュニケーションを図っているという。取材中も、手づくりクラブのメンバーが仙台の和紙を使ったブックカバーやティッシュカバーなどを作っていた。勤労意欲



気さくに取材に応じてくれた自治会長の渡辺さん

の充足にも一役買っているようだ。こちらを訪問するにあたって、仮設住宅は震災による喪失感から、暗く沈んだ空気で満たされているのではと想像していたが、実際の様子は大違った。住民は一刻も早い復興を待ちわびながらも、目の前にある生活を精一杯送っている。自治会長の「命が助かっただけでありがたい」との一言が心に残った。

扇町四丁目公園
仮設住宅



大鍋で湯を沸かし、そばの炊き出しの準備をする

卸町五丁目公園から北東へ車で一分ほどのところに扇町四丁目公園はある。外周四五〇mほどのその公園には、一〇棟もの仮設住宅が所狭しと立ち並んでいた。当日の仙台の気温は一〇℃。肌寒さも手伝って、あたたいそは好評を博した。大勢の住民が集まり、賑やかなムードの中で自治会の皆さんが取材に応じてくれた。

自治会長によると、今回の炊き出しに集まる住民の中には初めて見る顔もあったそうだ。「震災のストレスから、引きこもってしまう被災者は少なくない。ボランティアに来ていただくことは、そのような人たちが心を開きかけになっている」と聞いてドキッとさせられた。炊き出しボランティアの重要な意義



は、物質的な援助にあると考えていたからだ。しかし、その後の話で、仮設住宅が抱える最も深刻な問題は、食料をはじめとする物資の欠如ではなく、住民の精神不安にあると知る。ここに暮らすのは、当然ながら全員の地震や津波の被害にあった人々だ。「寝ていても小さな余震があるたびに不安で目が覚め、熟睡できることはない」という。震災の記憶が突如としてフラッシュバックし、えも言われぬ恐怖感に苛まれることもしばしばあるようだ。また、この仮設住宅には様々な地域から被災者が集まっている。震災によって受けた心の傷を抱えたまま、長年住み慣れた土地を離れ、隣人の顔も知らぬ環境で新たに生活を始めなければいけない苦労は、筆舌に尽くしがたいものであっただろう。高齢者世帯が多いというからなおさらだ。

ボランティアに求めることを問うと、自治会長からは、「何か特別なことをしてもらいたいとは考えていない。こちらに来て話しをしたり、聞いたりしてくれるだけで心の安らぎになる」との答え。被災者の気持ちに寄り添うこともまた支援なのだと感じた。



住民の方々と記念撮影 子どもの笑顔が印象的だった

11月27日

東中田
市民センター



久しぶりの再会を楽しむ関上地区の人々

全国各地から集まるボランティアの拠点である東北教区災害ボランティアセンター（仙台別院）を後にした私たちは、仙台市太白区にある東中田市民センターに向かった。普段は生涯学習の場として広く市民に開放されている施設だが、当日は名取市関上地区に暮らしていた住民の集いがあるとのこと。その会合にあわせてそばの炊き出しを行い、参加者の親睦の輪に入らせてもらった。

仙台市の南東、名取川河口付近の沿岸部に位置する名取市関上は、津波によって最も甚大な被害を受けた地域のひとつだ。移動の道中で立ち寄ってみたが、そこには高さ六・三mの日和山がポツンと残るのみで、あたり一面はまるで原野のような光景が広がっている。近づいてみると、家屋のコンクリートの基礎が無残な姿で露わになっており、ここがかつては住宅地であったことを物語っていた。海岸から一km圏内の住宅はほとんど流れ、地区全体では実に九〇%の家屋が流出・全壊し、人口のおよそ一割にあたる七五〇人が犠牲になったという。

会場に集まったのは、住むべき家を津波によって奪われた関上の人々だ。命は助かった



ゆりあげ 壊滅的な被害を受けた関上地区

とはいえ、身体ひとつで避難したために、生活に必要な一切のものも家と同時に失ってしまった。参加者のひとりには、「新しい生活を始めるにも、何もなかったところからのスタートだった」と当時を振り返る。現在は「みなし仮設住宅」に暮らすのが、この制度にも問題があるようだ。（六頁参照）

関上地区の復興への道のりは長い。地盤を三mから六mかさ上げし、津波に対する安全性を確保する計画が立てられてはいるものの、未だ着手されていない。また、「津波が来たときのことをハッキリ覚えていて。また来たらと思うと戻れない」と苦しい胸の内を明かしてくれた方がいたように、かさ上げの工事が終わったとしても、恐怖の記憶から関上に帰りたくとも帰れない人が大勢いるだろう。あの津波は、多くの命を奪い家を破壊しただけでなく、人々の心に深い爪跡を残していたのだ。

震災はまだ終わっていない

地道に続けた支援活動

二〇一一年三月一日、東北・関東地域を中心に起こった東日本大震災は、広範囲に渡り、かつて経験したことのない事態を引き起こした。

長野教区では、震災からこれまでの約二年間、十四回にわたって東北へ赴き、地道に支援活動を行ってきた。

流入物の撤去に始まり、そばの炊き出しや、リンゴの提供、キッズサンガなど、活動の内容は様々だ。

震災後しばらく続いた流入物の撤去では、被害が大きかった宮城県石巻市の称法寺を訪れ、重機が使えない中、墓石を一つ一つ移動した。また、イチゴ農園のビニールハウスの骨組み移動や泥の撤去なども行った。

現在は、そばの炊き出しと綿あめの提供を中心に支援活動を行っている。

支援活動には、松本市の「信濃むつみ高校」の生徒も参加し、若い力で被災地を明るくしている。生徒たちは被災地で大人気だ。被災者の中には「孫といるみたい。」と嬉しそうに話すご年配の方もいれば、生徒たちと楽しそうに遊ぶ子どもの姿もみえる。

定期的にお茶会を開催している現地のボランティア団体「どもちin名取」と、支援活動を通し交流が深まり、活動の幅はより一層広がった。

これまでの地道な支援活動を通じて、被災者やボランティア団体との人間関係が少しずつ確実に築き上げられている。

活動の記録

長野教区
これまでの活動。

2011年

5月

10日 イチゴ農園ビニールハウス内にて泥掃除作業
11日 宮城組称法寺墓地にて津波のよる流入物撤去作業



6月

9日 宮城組称法寺にて流入物撤去作業
10日 宮城県内避難所等へ物資搬送及び情報収集
10日 宮城組称法寺にて流入物撤去作業
石巻市ボランティアセンターに登録側溝の泥出し作業
11日 ボランティアセンター(仙台別院)にて宿泊場所並びにトイレ等清掃活動
国立診療所東北新生園へ物資搬送及び情報収集



7月

12日 宮城組称法寺にて流入物撤去作業
石巻中央児童館へ遊具寄贈
13日 宮城組称法寺にて流入物撤去作業・庫裏仏具移動並びに納骨堂・廊下等清掃活動
14日 ボランティアセンター(仙台別院)にて宿泊場所並びにトイレ等清掃活動
名取市仮設住宅にてお茶飲みサロン等地域活動支援



8月

17日 美田園地区第一・第二仮設住宅にて地域支援活動のお茶のみサロンと合同で炊き出しチラシ配布
18日 美田園地区第一仮設住宅にて炊き出し&キッズサンガ(ふれあいイベント)
美田園地区第二仮設住宅にて炊き出し&キッズサンガ(ふれあいイベント)
【炊き出し内容】
冷たい信州そば(かけそば/信濃町トウモロコシ/かき氷/夏野菜/干ッスサンガ)
輪投げ・くじ引き・玉入れ等 子どもからお年寄りまで約50名参加
19日 宮城組称法寺に信州そば寄贈



9月

12日 宮城組称法寺墓地にて流入物清掃活動
13日 名取市仮設住宅、愛島東部団地、箱塚校団地にて地域支援活動(茶話会、風船アート・リンゴ・綿あめ等提供)
14日 ボランティアセンター(仙台別院)清掃活動



10月

11日 愛島東部仮設住宅にて茶話会支援(マジックショー・綿あめ・リンゴ・梨等提供)
12日 箱塚校仮設住宅にて茶話会支援(マジックショー・綿あめ・リンゴ・梨等提供)
13日 美田園第一仮設住宅、植松入生仮設住宅にて茶話会支援(マジックショー・綿あめ・リンゴ・梨等提供)
14日 イチゴ農園ビニールハウス、宮城組称法寺(石巻市)墓地にて流入物清掃活動
ボランティアセンター(仙台別院)清掃活動



11月

28日 宮城組専能寺へリンゴ持参
29日 岩沼市仮設住宅、里の杜西住宅集会所にて茶話会支援(綿あめ・リンゴ提供)
30日 名取市仮設住宅、愛島東部仮設住宅にて茶話会支援(おでん・綿あめ・リンゴ提供)
宮城組称法寺墓地にて流入物清掃活動



12月

19日 箱塚校仮設住宅にてそば提供
20日 美田園第二仮設住宅にてそば提供
雇用促進住宅にてそば提供
21日 美田園第一仮設住宅にてそば提供
植松入生仮設住宅にてそば提供



2012年

2月

5日 箱塚校仮設住宅にてそば提供
6日 箱塚校仮設住宅にてそば提供
7日 美田園第二仮設住宅にてそば提供
雇用促進住宅にてそば提供
12時~13時 雇用促進住宅にてそば提供
16時~17時 愛島東部にてそば提供



3月

4日 石巻大街道復興祭「絆ハートフル・フェスタバル」にて炊き出し(そば・綿あめ・リンゴ・リンゴジュース等提供)



5月

11日~12日 増田西小学校・体育館で実施されたマルチパートナー主催洋服配布会にて炊き出し(そば・綿あめ・子ども向けイベント等提供)



7月

13日 名取市仮設住宅植松入生・雇用促進住宅にて炊き出し(冷たいそば・かき氷・輪投げなど提供)
14日 名取市杉ヶ袋北・小塚原集会所にて、どもちin名取ボランティア団体と合同で炊き出し



9月

13日 扇町四丁目仮設住宅・卸町五丁目公園仮設住宅にてそば提供
14日 名取市仮設住宅美田園第二、名取市杉ヶ袋南公会堂集会所にてそば提供
15日 名取市仮設住宅 雇用促進住宅にてそば提供



11月

25日 若松会「民間借上げ住宅の会」にてそば・綿あめ提供
26日 仙台市仮設住宅卸町五丁目・扇町四丁目にてそば・綿あめ提供
27日 名取市お茶会集会所(東中田市民センター)にてそば・綿あめ提供、どもちin名取ボランティア団体と合同



苦しみ、悲しみに寄り添う

支援活動のイベントに訪れる被災者は皆笑顔だ。嬉しそうにそばを食べながら、会話を楽しんでいる。しかし、元気で明るく見える被災者の心にある傷は大きい。あの震災を経験した被災者の苦しみ、悲しみはいかなるものか。長野教区では、被災者と触れあうときは、「傾聴」の姿勢をくずさない。「傾聴」とは、一生懸命耳を傾け、心で聴いて受け止めるということだ。

被災者の話に、一生懸命耳を傾ける心で受け止める。悲しみや苦しみにただ寄り添う。支援活動者に出来ることはそれだけだ。

私たちは忘れない 続けることの大切さ

震災直後は「復興」という言葉が流行し、多くのメディアが被災地や被災者の様子を取りあげた。人々は被災地や被災者に関心を持ち、復興支援活動が盛んに行われた。

ところが震災から約二年経った今、メディアが震災について取り上げることは激減した。それと同時に、人々から、震災の記憶が失われつつあるように思える。

被災地と被災者が取り残されつつある中、長野教区では、これからも変わることなく支援活動を行っていくという。あの震災を、被災地を、被災者を絶対に忘れない。





震災前は宮城県の仙台市若林区荒浜に住んでいました。今は県が借り上げた民間借り上げ住宅（みなし仮設）に住んでいます。

皆さんが知らない民間借り上げ住宅（みなし仮設）の現実を知ってもらいたくて…。今後、震災が起きてから私たちのようになってほしくなくて、みんなに伝えたいと思いき「若松会」を立ち上げました。

それぞれの事情があって避難所にいけなかった若松会会員は避難所に食べ物をもらいに行っても断られました。同じ被災して、しかも家もすべてなくなったのに見捨てられたのです。

プレハブ仮設住宅では楽しいイベントをしたり芸能人も来たりします。借り上げ住宅はイベントもなければ芸能人を見ることもできません。プレハブ仮設にいわば「住んでる者以外は来るな」というひともいます。子供たちは学校に行けば前日の楽しいイベントの話が聞かされ落ち込んできます。学校から帰っても住んでいる場所がバラバラなので学校の友達と遊ぶことができません。高齢者の人たちも住みなれない土地に見知らぬ人たちの中で引きこもりになっている人がたくさんいます。

若松会では、そんな子供たち、高齢者たちのために毎月1回のイベントを自分たちの手で開催しています。毎月1回のイベントですが喜んでる姿を見るとイベント内容や準備が大変だけど、やってきてよかったなと思います。（若松会ホームページより抜粋）



若松会のイベントの様子。長野教区はそばや綿あめの提供を行った。

みなし仮設住宅（借り上げ住宅）とは

震災などで住居を失った被災者が、民間事業者の賃貸住宅を仮の住まいとして入居した場合、その賃貸住宅を国や自治体が提供する「仮設住宅」に準じるものと見なすこと。また、そうした賃貸住宅や関連する制度。

一般的に「仮設住宅」と言うと、災害発生後に応急的に設置されるプレハブ住宅を指す。国や地方自治体などの行政主体が災害救助法に基づき設置し、被災者に貸与するもので、設置費用や賃料は国庫負担によってまかなわれる。

2011年3月に発生した東日本大震災では、プレハブの応急仮設住宅の設置に加えて、国や地方自治体が民間の賃貸住宅を借り上げ、被災者に応急仮設住宅として提供する対策が進められた。また、4月末には、被災者が自力で賃貸住居を見つけて入居した場合でも、仮設住宅と見なして扱う対象に含めることを決めた。

みなし仮設住宅では、住居の家賃や敷金・礼金・仲介手数料などが国庫負担の対象とされる。適用期間は2年間である。既存の空室を利用するため、プレハブを設置するよりもコストが低くて済む。また、住み心地もプレハブに比べれば快適である場合が多いという。

みなし仮設住宅の課題として、行政がみなし仮設住宅に入居する被災者を把握し、支援を行き渡らせることが難しいという点や、被災者どうしが接触する機会が少なく、不安や孤独などに陥ることも懸念されている。

信濃むつみ高校



信濃むつみ高校は、長野県松本市にある通信制・単位制の高校だ。生徒は復興支援活動初期からボランティアに参加している。授業の一環として始めたボランティア活動だが、今では自ら志願してボランティアに赴く生徒も多い。生徒の若いパワーは被災地を明るくし、被災者に笑顔をもたらしている。

Voice

浄土真宗本願寺派長野教区では、震災直後より15回にわたって東北に赴き、復興支援ボランティア活動をしてきた。参加者はのべ154人を数える。今回、その中でも積極的にボランティア活動を続ける丸山次男さんと保谷侑子さんにインタビューをした。



飯山組宣勝寺門徒 丸山次男（まるやま つぎお）さん

丸山さん「あの震災の後、栄村でボランティア活動に携わりました。そこで被災地の様子を見たり、被災された方と接したりするうちに、どうしても東北に行かなければならないと思うようになりました。本当はすぐにでも行きたかったのですが、栄村の支援が一段落した二〇一一年の六月に初めて参加しました。保谷さん「阪神淡路大震災に始まり、台湾地震、中越地震でもボランティアに行かせてもらいました。その活動の経験から、八〇歳に近い私でも何かできることがあるはずだ、何かせずにはおれないと思ったことがきっかけです」

「ボランティア活動を通じて見えてきた、被災地の現状や問題点をお聞かせください。」

丸山さん「初めて行ったときには、沿岸部はまだがれきの山でした。いまはがれきが撤去されてあたり一面草だらけになっています。そこを見ると復興らしい復興は感じられません。ただ、会う人に本当の笑顔が見られるようになって、その点では少しずつ変わってきている感じがしますね」

保谷さん「今回、若松会（次頁参照）という借り上げ住宅に初めてお伺いして、住民の方々とお話しをさせてもらいました。そこで、借り上げ住宅にいらっしゃるという点での差別があることを聞きました。同じ待遇を受けられない悔しさを、行政に訴えてもどうにもならない辛さを涙ながらに話してくださいました。「そういう差別を受けたときに、私、いつそあのとき死んでいけばよかったんだわと思った」と、生き残ったことに罪悪感を持っている人もいます。そのような人のためにも傾聴ボランティアや心の支援を続けていかなければならないなと思いました」

「ボランティア活動を続けられる原動力は何でしょう。」

丸山さん「ボランティアをしながら自分たちも成長できること。一緒に行っているむつみ高校（次頁参照）の生徒には感心させられましたが、最初は困るようなことをする子もいたけど、二回目、三回目になると率先してやってくれるようになった。それから、どの場所に行っても、長野から炊き出しボランティアが来るという告知のチラシが貼ってある。楽しみに待ってもらえていることは張り合いです。それで、帰りに「また来てよね」と言われると、「また来るよ」と言ってしまう。それは裏切らないようにしようと思うんですよ」

保谷さん「むつみ高校の生徒にとっても引つ込み思案の女の子がいました。恥ずかしがりやで人と話すのも苦手でしたが、被災者の方とのふれあいを通じて少しずつ心を開いていったようで、支援物資が集積されている体育館で、大勢の前でバイオリンの演奏をするまでになったんです。ボランティアをすることで成長していく姿を見られてうれしく思います」

丸山さん「身体が続く限りは、少なくとも長野教区でやっている限りは行きたいですね。でも、被災地に行けなくても身近なボランティアはある。この活動のことを伝えると、「東北までは行けないけど、代わりに持ってきてほしい」とそばを一箱持ってきてくれた人がいました。ボランティアをもっと多くの人に知ってもらい、こういった輪を広げられるようにしたいと思っています」

保谷さん「今回の訪問で、初めて出会ったとは思えない心のふれあいを感じ、被災された方の目の差しにも似た愛しい眼を見ました。その眼は哀しくも澄んでいて、涙を、いのちを、ことを宿しているようでした。私はその眼に魅かれて、また出かけさせていたきたいと思えます」

「これからも復興支援のボランティア活動を続けていかれますか。」

丸山さん「私としても、被災地の皆さんとの交流を通して、つながりの中の一員にさせてもらってきたという喜びや、和顔愛語をもらって帰ってきます。そういった素晴らしい感激があるから、また行きたいという気持ちになるんですよ」



河西組西光寺門徒 保谷侑子（ほや ゆきこ）さん

あなたの 支援で 生まれた 笑顔



名取市で被災した女性たちが、ドレスの形をした「ドレスタオル」や携帯用の裁縫道具入れ「お針セット」、買い物のときに便利な「エコバック」、色あざやかな「七宝まり」を手作り・販売しています。

みなし仮設住宅や住宅被災者向けに茶話会を開く市民グループ「名取交流センター」が製作を呼び掛けました。

手芸に取り組むのは名取交流センターの茶話会に参加する女性20人。

眠れない夜、手芸で心を安らげ、それを誰かに使ってもらえる喜びで笑顔になります。



あなたの支援が、被災地に
笑顔を生みます。
ご協力をお願いします。

あなたの支援でうまれた笑顔



料金

- ◆ドレスタオル ◆お針セット
- ◆エコバック 各1,000円
- ◆七宝まり 2,000円

いずれも材料費を除いた金額が作者への支援金となります。

お気軽にお問い合わせください。

名取交流センター(ともだちin名取)

メール: natori-koryu_center@mail.goo.ne.jp

活動内容はコチラ

ブログ: http://blog.canpan.info/tomo_in_natori

長野教区では、今後も復興支援活動を続けていきます。現地ボランティアにご参加いただける方、支援物資を提供していただける方は下記までお問い合わせください。

「御同朋の社会をめざす運動」長野教区委員会 TEL. 026-234-1796 (長野教区教務所内)

*この活動は、皆さまにご賛同いただいた「たすけあい募金」をもとに進めてまいりました。引き続きのご協力をよろしくお願いいたします。